南部漁民漂流記

全

862
1

9

ガラス使用

862-1
(9)

[illegible]

唐国福建省江漂流仕候奥州南部之者六人當巳六月
廿日未拾壱番船ゟ送り来申候付翌廿一日右之者とも
呼出し吟味仕候處申口相分り兼候尤去〻候付於唐
国彼者とも相係世話仕候黄福童天業と申唐人
是又十一番船ゟ乗渡り候ニ付両人呼出し段〻相尋口
書申付候依之相分り申候所ニハ唐人共の申口朱
書仕差上申候但五官と申ハ童天榮役ニ而座候
則漂流人申口之趣左之通ニ座候

南部大膳太夫領分奥州盛岡郡

禅宗　白濱村船頭　又五郎　未五十二才

同宗　同所水手　伊七郎　未二十五才

同宗　同所水手　五兵衛　未三十七才

同宗　釜石浦楫取　利右衛門　未四十二才

同宗　同所水手　長助　未四十八才

浄土宗　（山）火畑村炊　文治　未二十七才

私共儀去ル午十一月王許分方船仕難風ニ而唐國福建
省江漂流仕候処當未拾一番船ニ而江被送十二月九日當津へ
着船仕候得共廿一日御役所江被召出始終之仕合漂流之
次第一通り御吟味之上揚り屋江被遣猶又御吟味之節
委細申上候趣左之通ニ御座候

一私共在所白濱村久保屋善兵衛船神力丸十六端帆乗組
八人積物塩引鮭串貝塩鱈干鮑鰹節等積込江戸表江
為商賣午十一月十七日之朝出船仕順風ニ而同廿五日仙
臺沖迄走り候處同廿六日暁方より北風強く吹
おし沖之方吹離れ申候風波等強く相成船危く候間

翌廿七日帆柱を伐折申候得共猶強かけ風はげしく募り候而
浪高く船の上を打越申候ニ付垢取をも仕候得共船中
浪も高く難儀至極ニ付荷物取捨追々荷打仕候ニ付
候得共同夜十八日之曉風少しよわり申候何卒ぬけ候
吹流され申候而者仕合風も無之船中難儀至極ニ付
指一艘一面一挺ニ而荷物等を海中へ投入
何を頼み申候而何方とも日本之地流寄候様ニ願離候
立直り仕候得共日数も相立候ニ付十分ニ
候處唯今果果山も見へ不申大難ニ及可申候
方も無之風ニ流れ浪ニ任せ然共一ニ年

候大抵申酉之方を地方と心得寅東方針を考へ梶を
揖柱に代りて押建十六端之帆を巻かけにて随風にまかせ
て罷在候内は此帆檣両度迄折申に付仮屋仕凌候処
へ申候糧米ハ取（トリ）に捨切之其へ鰹節串貝等を削り候て食事
仕候水ハ元来無之候得共餅米少々有候を度々潮水を煮申
甚困窮仕候節天水在之候て絞り咽を湿し申にて此節難儀仕
候て年を越二月迄百日余も漂流仕

一三月四日之朝遠方に小船の様成物の見かけ候に付是を志し近
付し所手を附け揖を取候ハ初の程は近寄申候にて就て
其船之所ハ伴の船より小船を寄し不見馴形の人四

乗り来り候に付船を見るに殊外驚申候船共之形も数百石積
候ニ乗居候者ハ人間の様にも無之候ニ付恐敷存候所彼者共へ必
驚候ニ而近付が○申候ニ付舳を放申候得共一向通し不申候
ニ付椀を出し食を呑候形容を仕食残捨仕方飢渇の
及候躰を致して見せ候處右之者共心得候而是ゝと申候て本
船へ乗り候所米五六斗俵ニ入並ニ小桶ニ水を入て持参り
我等へ与へ候る猿の方を指彼方ハ米も水も沢山有之由合之
手文字候由ニ趣ニ相見候手真似をいたし教候其船ハ虫不
取捕申候右之小船ニ奥綱在之候捕船を附候て日本船も捕
船を遠く長崎湊乃ごとく大船ニて人も大勢ニ乗申候

ガラス使用

扨右費ハ米并速飯焚薪等之儀を助り彼者共ニ敬地方、
志し粥之錢ニ而右流民共中ニ而一日代銭何文宛ニ而くれ候や家数
二百軒斗りも有之候湊ハ宜所ゟ流民様之儀ニ而候支度
申候る船中守付并中ニ而門役人と相見候ニ付五六人計も
船ハ乗り船中相改ニ付船切ニ而改見世申候一旦役人罷帰り
候後番船三艘相添ニ而我等船ニ唐人両人番ニ付差居
申候私共之儀ハ唐人ニ而訳申候途中ニ而出仕候処言辞ハ一向
通シ不申候得共唐人共フケントフケントト申候ニ付夫を此処の名と存居候
流寄り候所之名フケントと見候ハ福建と申南京詞ニ而之由
唐人共之而て総状と被申候ゟ居て五官申口写ハ

福建省之内福寧州之小村福頂縣と申所ニ而御座候趣
之湊之名ハ秦興港と申候役ニ乗り候役人ハ巡咄官
と申候同所之頭ニ御座候此者見候處知縣之役所と知
縣ゟ又知府之役所申上候而其上ハ上下知を以横役相勤候
成之候役船守付も番人差置候儀ニ御座候知縣と申ハ一縣
之惣司知府ハ又夫ゟ上ニ而一府之惣司之官名ニ御座候
一翌五日唐人乗り候ハ上陸ニ相招候引立候ニ付不踈様上り申候
並役所之組成處ニ而右重き役人の様ニ相見申候ゟ罷若
何年先吟味之於手之錢貳貫四百文米貳俵並薪相添
唐人人足ゟ本船積申候其後一両ニ私共本船ハ相越居
申候

ガラス使用

此役所ハ福頂縣之知縣之役所ニ而是ニ付而乾隆帝
南巡ニ付當杭州府へ御遊覧ニ而ニ御座候福建之總督杭
州ヘ参られ漂流之次第を奏聞致され候由唐人申
申候

一同九日又役人参り船中之荷物改唐人足ニ而傳馬ニ而積ミ船
六艘拂之此所ゟ二十丁計り積役所へ積送り荷又申候
此所ゟ伴七郎右之積所ゟ出立致又之様子見ニ伴ひ参り申候
荷ハ官庫ニ而則役所ハ荷之由荷物ニ而委細書付
知府へ出し知府ゟ福建之總督ニ差出之由又唐人申候
其後右之荷物之内銀錫鑞ハ皆腐り候ニ付用立不申候

ニ而無之候ニ付唐人方ゟ勘定致候賣拂候而一々改書付候
又五郎伴七郎ニ見せ申候委細之儀ハ存不申候所何卒唐
人ニ申付為致一向ニ相分り不申候左候ゟ其代銭を相渡申
寧波之役人ゟ申参候へハ役所ゟ相渡し唐人船ニ而細右之
銭受取申候

一同十六日私共八人ニ而上陸いたし見物致候所ハ港も船數多く
諸事存外賑々敷又五郎伴七郎之通り唐人へ遣ゟ船ニ而船々ニ而
我々六人之者ハ陸ゟ参り申候町ゟつれ右家居瓦葺ニ御座候ハ一々
石を鋪並ぶ家ニ而金子道具類ニ而見物致させ申候一枚宛相渡
麻ニ而候上ハ白ニ而武装此上ハ皆番人壹人ニ而四人と

附添調ニおゐて用達ニ候呉候其朝夕ハ菜賄ひ致し大根
豆腐なと貰ひ候職ニ調候ゟも其外十日斗り過きて又
五郎文次共ニ上陸仕一所ニ於て住居仕船之義ハ唐人安
附ケ預り置其後ニ差置申候所四月頃迄逗留仕候
此所在留之内ニ館訳と申候者日本之言葉能存候附添
候者ハ千總と申候知縣之下役ニ御座候番いたし又
同道いたし附居申候事ニ御座候由五官申候

一　三月廿九日ゟ御衣服物并手道具取返し唐船ハ船様仕四月
四日ニ残八人唐船ニ乗せて登ニ寧波國之役人附添外ニ重役ハとも
見ハ候船二艘附添つゐて漆出船仕候処右寧波を離れて候役
人二艘ハ後ゟ附添参り船ハ船繋不送り候得ハ扱子[illegible]
私共乗候船ハ帆を引南之方ニ走り候処船ハ[illegible]
ハ不り進み候ハ同所ニ罷在候ゟ外ニ見へ候ハ[illegible]
可くに一每日和待仕候人家在之漆も在りて又人家あるさ有
もおつるよし申候

此程ハ官船ニ見合申候二艘ハ参将副将と申官人乗申候
其外ニ乗り候もの由候上知府ニ御座候申候　右之船
寧波國之役人ハ知縣之下役ニ而五官申之候
私共乗候船ハ船頭[illegible]
申候フケン漆[illegible]

船ハミンホ宗船ニ御荷を積合相渡申候

一四月廿三日エモントと申所へ着岸仕候

エモントハ廈門と書たるよし廈門之二字漳州言葉ニてハエ、

ムントヤ申候を唐通辞事ニ而あもいと申候

右港ハフケンより州迄里数何程ニ御座候哉不知申候

秦嶼より廈門之海路ニ陸ハ八日路海上ハ大抵十五日

計りニ候得共順風ニハ六日計り参候里数も不存候

申候廈門ハ長崎よりも繁昌之湊ニ御座候由山付之湊

ニ而唐船何千艘と申程影多く有之毎日入船出船数多

殊ニ繁昌成所ニ而陸ニ船を遠り候場所ニ候

此所ゟ産物砂糖并ニ煙草米等も津出しいたし候砂糖ハ

南京積廻シ綿と交易いたし候諸国之商人集候所ニ候

右大馬頭と申候此所ハ殊ニ繁昌ニ候大馬頭と申ハ中又宿申

之ハ唐人申候ハ日本ニ大坂之事と成も大馬頭と申候

家居甚見事ニ繁昌フケン之様ニ相違無之候即日又五郎伊七

郎両人船頭国之役人附副上陸仕役所へ罷越候所ハ余り古

き是ハ廈門之海防と申役所ニ而重キ海陸之官ハ撫院なと

同所之重き役儀ニ御座候由又宦ト申之ニ

州役所ハフケンより大〻大門之様門ニ額有之常ニ鎖し腰

日本の門のことく締りなくいたし有之御座候

役門と申ハ官府通行之門ニ而諸人通り候事不叶候故

五官と申ハ門より内ハ皆瓦石ニ而割り組合而塵穢無之

是ハ相放し候而殊麗成ものとも相見申候

此所ハ公事訴訟之節吟味場ニ而罪人共ニ拷問いたし候

所之由五官と申候

定物ハ右より重キ人とハ伺申役人ニ相吟味之上放免事を

申付ル事ニ候大勢之役人共ニ預り事ニ御座候

居候由ニ候

定物之役人ハ海路ニ而役差図と申官ニ而無御座候

一通り吟味之上江戸中出後ニ海路ニ而御差遣ニ相成候由官中と申候

同十五日荷上役私共不残宿之隣ハ仕出町と申所ニ坂一ツ越シ

寺ニ参候処ハ寺家一人ニ住ハ人ニ而是ハ本家ニ而此寺ニ茶ハ藥

候ニ遠ひ成候ニ住持之名をヘイシエントと申ハ住ハ常ニ衣を着し

人を訪れ候而石像ニ酒を居て釈迦之釈迦仏蓮之花ニ坐し

香燭に備へ立候ニ通候事ハ仏前之拝ニ酒を毎日線香を

たて候様相見へ申候

一屋門ニハ館駅之役ニ而清浄成所寺ニ有之申候

寺号ハ銀園寺ニ而石仏ハ釈迦之像ニヘイシエント

見附ハ住持之名之儀ニ而御座候二字共漳州音ニ而

ヘイシエントと申由ニ御座候

朝夕の食物之儀是又手寛に致し魚物菜類等給させ申候

船頭ハ日本のことく荷ひ商ひ致し候者居合候ハヽ調へ

此者売候菓代一日十銭ツヽ被渡果ハ好候

程度ハ不苦段役所ゟ被仰渡申候右ツケン之通り好候程

役人壱人宛六人ツヽ番ニ附添内壱人ハ至極しん切の者ニ被

存し居申候

一 我組八人之内五太夫大坂屋理左衛門事若々荷宰領ニ候

利右衛門与申者年比五拾壱才ニ相成候処正月三日ゟ腹の脹り候

病気ニ取付申候又五郎附添之役人共ゟ療治之儀を

相頼候処早速医師壱人召連れ脈をとらせ被下申候

其跡より薬一服持参用ひ試み申候

然医師ハ上手ニ而候哉薬を呑せ候得共験有之不申候

ニ付療治相頼ミ候得ハ食事之儀其後ハ薬ニ而呉不申候

候而食物も給ず段々腹張念増同十六日ゟ相病死仕候

此段附副之役人共ゟ屋敷役所江申上候処役人四人参り

死骸を相改之上役所の方ゟ可申付旨相待居候処

其夜五郎兵衛宰領之役ニ相越候ハ其通ニ付品申上候様書付ニ而申上候又ハ

役所ゟ役人四人之役人為検使参り候故検使相済申候

相済申候

此役人共内使ニ而以同様之検使役人共ゟ申上候旨被申上之候

ガラス使用

夫より私共儀ハ此者即日之往迎又五郎を相持て離き日本
銭六貫文ニ而役持を頼棺其外仕度物等入用之品求有候
唐人を雇ひ寺之宗旨請り候唐人之墓所へ送り葬所
埋葬仕候

棺ハ厦門の町ニ平日拵売合有之雇人足ハ百姓之申官
申之候

其節役持も附副致申候　埋葬ニ付而ハ経をも不読何事も
路ふ申候事帰り候而佛前へ香絹菓子等備へ私共より同様成
嵐夜のお坊ニ人参り木魚太鼓を打鳴し読誦経申候
役之役持布施物として右本銭五百文差出申候

一同五月廿五日
唐國ニハ當年五月閏月ニ而六月を四月と致し候宗六月
と有之候私共方ニ而ハ閏六月ニ御座候
附添候役人私共を明日船ニ乗せミシホ之被送候と申候
申候ハ翌廿六日商ひ船ニ私共外ニ商船荷物積候宗旨
而之役人之人附添即日船ハ出し申候湊之内輸宗雲井申候
之洪船ハ福建ニ積南宗商賣ニ致候役船ニ船主六助氏ニ
て四年附添之役人ハ差官ニ候而厦門之役所ニ
之書状を持寧波之総府へ送り届候使者ニ候而申上
官申之候

六月朔日此所ゟ船積し南風ニ而走り出し候節ハ見送り之
船も出之山も見へさる遠沖ニ而ミンホトハ着船迄ハ吹流し候風
ましく夜昼共走り申候此間之里数ハ当所役所ニ而相尋候所
廈門ゟ寧波迄之里数六十余里有之由役人中ニ而一更ハ
唐道之六十里ニ而日本之六里程ニ相当申候六十更ニ而ハ
日本道法ニ而三百六拾里程之積りニ而御座候
寧波ゟ同所傳八と申者六月三日此船中ニ而痢病相煩ひ
付申候処船中ニ而左候得共養生之薬も相用ひ申候得共相果申候
一同十日唐府ミンホトと申湊江着船仕候
　ミンホトハ寧波之事ニ而寧波之二字南京音ニ而ミンハウ
　ト申候を覚へ遠く相見へ候由ニ候
此所ハエモンゟハおよそおそり候而船ゟ大方長崎程ニ相見へ申候
湊成所ニ而唐船数多有之右船入船共大方弐百程
ツヽ有之山も多く相見へ船入ニ案内致し川下ニ而唐人
船へ即日役人共船ニ乗り船中改メ相済申候得ハ
此役人も寧波府鎮海縣之番官ニ而舟ニ乗川筋ニ入
沿海之桃花渡と申所ニ而番官申之候
其日又五郎伴七郎両人致上陸附添役人之内案内ニ而
町筆之内門構之大き成家同所ニ而何か申付（付候而着候所ニ而）
是ハ十一番船荷主信公真之家ニ而鎮海縣江着船ハ

ナ たし候と甚伝知縣と伝ふ奥へ参り居申候左ニて候附

添ハ役人両人ニ御座候も一人ツヽ船ニ見廻氏ニ参候出不居（申之候）

同十三日七人一同ニ陸へ上リ寺ハ参附船共ハ二階ニ御安置候

御掃除出家一人修焚し唐人一人此所ニハ何も無之二階ニ日本

之通り之釈迦之木佛中仕し像一躰香焔佛具等有之候

其外木佛数多有之候

船號名も寺ニ御座候ニ付関帝之廟ニ見参し釈迦も有之

又天后妃后水后之三官と申菩薩も安置いたし有之候

船堂ハ普陀山と称候弟子僧一人常ニ居申候普陀山

和尚ハ旦那ニ往来いたし出不居申之候

此所ハ十一番船荷主之支配ニトンスイトと申唐人一人

始終付添長崎ニも船ニ世話ニ相成候

トンスイト義ハ唐人之名ニ而是ハ日本通事と申

義ニ而此者之事を南京詞ニ而通事と申候と見遠

候事ニ御座候船主ニして名ハ黄福と申候福建之人ニ御座候

南州寧波府之人ニ而荷主ヲ為致世話をいたし候

由申之候

此所役所ヨリ番人三四人ツヽ代り合逗留中日々相附添申候

来る新銭ヲ以て錢ハ五モンヲ為遣役所ヨリ相渡し候日備ニ菜

いたし野菜類ハ振売ヲ調申候

一同十四日ミンホウ役所ゟ呼ニ参今朝ゟ様子ニ付役所之并
門之額締り有其上ミンホウゟ通詞参り此者もトンスイ同所
ニ而出銭申候
此役所とハ参将之役所ニ而候由五官申之候
此所ハフケンエモン様とハ遠候十二三四日ほと之道のりを申候ハ候
とのもの之所ニ通し申候トンスイも十二三ツ程之通辞相参り申候
黄福義ハ去ル廿五番船ゟ物入ニ而渡り館内ニ一年程罷在候
右後已ニ十三番船ゟ出銭当正月帰唐仕候日本詞
相通し申候
一傳六義上陸し後病気腹痛相重り候ニ付トンスイ荷色旅ハ
申遣し醫者をかけ療治仕候処快無御座候ニ付四度迄醫者を
替申候煎薬茶ある方ゟ薬越候薬一貼ニ而嵩日本之茶七
八貼も有之水加減ハ其方日本ゟ茶ゟ甚濃ク煎申候
四人之醫者ハ信公真公故ニ而官醫之趙先生張先生
天先生周先生と申候由五官申之候先生とハ其人之醫
師之事を申候ものと相聞申候且又人参相應ニ付一貼ニ壱匁宛
信公真公ゟ参ル相果候迄相用申候由黄福申之候廿五方
之書付此所ハ別帳ニ相記し置申候
一九月廿七日前々之方ハ呼ニ参り舟ゟ役所ゟ罷出候ニ付
申候フケンヨそ船弁御行事掛候代物之由銀子銭等相渡し

且又船ニ而夜服被札候得ハ右衣服ハ日本ニ而仕立御座候而
しは候ハ何まり見苦安さる新衣裳被下日本仕立ニ仕候木綿
着物一ツ宛七人之者ニ頂戴仕候、役人衆ゟ被下候、金真加物御南
津迄被を通し申候、木綿襦袢之一ツ是又一所ニ頂戴仕候
八日七人一同当十一番船ハ乗船いたし千波追て着物船積仕候
十一月六日迄ハ順風無之ニ付船繋罷在候
一十一月六日ミシンホの湊を船出し三日計り過ぎデガイクワンと申
之家数五百軒も在之候、湊ハ碇を入申候
デガイクワンと申ハ鎮海関と申を見ハ遠ク候而寧波と申
之津ニ候、家数七百軒余在之候、此所ハ関所ニして参将相詰
在申候由五官申之候
此所ニ而番所ゟ役人大勢罷出、唐人并船中之人別改、姓名年
付等迄も悉く書留、船中相済候而役所ニ而当所之者ハヱモンミ
ニホ等之船番所を通り候ニ付見申候、紅粉高売致候船ハ無
之段を請候而船斗相改候ニ付、拙者共ハ陸へ上り此辺迄参りて塩竈相
並ひ数ハ何万と申事数影見へ申候、塩焼き候様子日本之
仕形とハ少し違ひ候様子ニ而大きなる小屋をかけ其内ニ而乾かし盤
まゝ之台潮を汲かけ申候、小屋之内ハ竈有之候、此支度ハとも之
相見へ申候
塩浜之事ハ塩場と申候、年々何百貫ツゝと申塩商売仕候之

右諸方ハ横道ト申ハ塩壱斤ニ而泥銭ニて右下直ニ有之候ハ
百斤ニ付百八拾文ハ租税ニ而浙江ニ塩駅道と申役所有之候支
配ニ而此所ニ而も下役ヲ差置候所ニ抜売致候事を禁し塩運上ヲ
取立申候塩焼ハ農人ニて塩汲ハ女之業ニて御座候但是ニ
此所ニ取りしまりハ是又塩駅道之官ハ大方参将総之位ニ而勤
ル由夷細五官申之候

一翌日デガイクワン出船いたし候処変風ニ而又走り出帆致候所
人家無之小嶋ニ三四ケ所有之出帆中ニ而梶壊方ニ而離申候ハ
一向ニ漂泊場ニ無之候ニ付走り西風戌亥之風ニ而帆ヲ
帆掛ニ而漂中ニ候

一十二月三日朝ハ天気ニ而候や昼過ゟ俄ニ急ニ東風ニ而節
急ニ南ゟ風強く吹出し諸津の方へ吹付られ候ニ付大帆之和綱
ゆるめ候内ニ又ゟ風強く候而和綱絶候而船端之腕木
九尺斗吹折帆のまゝ無り候ニ付船之ニ而唐人之桶板ニ取付く
之候血を吐出外ニ而船中上下騒ニ而取わけ候ニ付唐人ニ浮
無之程出来申候
此者ハ陳祐観と申ニ而御座候ニ付早速ニ而唐人ハ一同
津と申ハ天草ニ而候ニ付原ニ而津と申所迄ハ先ニハ大ニ渦巻
無之ニ付漸ク波ニ而走り候
一其夜ニ風雨強く諸津ニ又ハ口ニ吹付られ候所唐人共ニ殯入
ニ而坊主

ガラス使用

手形看板之台程ハ二三丁宛手傳出シ置候押付候唐人共附外
騒立候得共何分天草ゟ御役人衆大勢ニ而小船數千艘
集り湊内ハ川入らせ申候故共風強くありくとり立申候付
無是非元之船ハ相繋キ申候併唐船之木碇ハきれて申候故船共
取揚ヶ鉄碇二三房天草ゟ鉄碇弐房大綱共持来り被渡候ニ付
不残打込ゟ湊船と繋ぎ留申候此処逗留中唐船五艘宛ニて
着岸居表ニ而有之候よし此節四五ヶ月程逗留申候

一傳六病身船中ニ而不食ニ付船主財副ニトンスイと申官之
者人自身ニ薬を貰ひ候抱被呉候得共次第ニ相衰へ翌月
七日夜半比病死仕候依之私共書付を以天草御役人
中ハ此旨以願申上候處早速御役人衆ら来、死骸を改候之上
桶ニ入小船ハ葬送候様嶋人附添葬り申候

一同十九日夜九ツ時ゟ天草湊之津出帆致し瀬戸内を離
れ候より帆を引揚ケ候處順風ニ而翌廿日八ツ半時長崎表ニ御
同津ハ着岸申候

一私共唐国在留中邪宗門之儀堅ク被申付候段も勿論怪変
佛像佛具類等も見当り不申候其外怪敷物ら目撃仕候
付宗門之儀見聞不仕候儀も毎々尋候得共何分ニて覚へ
不申候ゆへとも相知不申候

一在留中通弁之儀一向無御座萬事手真似ニ而用達仕候

〻南伴七郎其人おゐて并文字を存居候ニ付筆談にて通し
〻字も覚候ミンホ〻く八日本辞おく字覚居候之通ハ
通し申候トンスイ日本辞覚居候も是又十二三日ニ而相用
立申候

一衣服ハ日本ニ而ハ國王様も常重き人と其外之役人衆も
去海ハ筆唐人おゐても紅遣ひ候絹布綾日本刑常ニ
光り魏ノ将衣裳ニ〻かけ申也も同前ニ而縫上ニ珊瑚珠なとも
以〻の婦人の飾り之にて婦知不申候翠り之頭も玉簪を
是ニ〻似候有之て朝とも婦中にハ絹布細工
形ハ幾世之ハ女之衣服様ハ男ニ替不申常ニハ

一食物之事飯菓酒醤油ホ日本之通有之味噌無之其外
野菜者有之豚鶏好候申候フケンにて初メ上り候六人之者
一日役所ニて料理を被下候に付何も腹ニ飯酒菓
子等添ふかし申ニハ料理之仕形器物之飾り日本ニ而ハ少も見
不申候其外重き役人と相見ヘ候人より盃をとらせ候
振舞ニ御座候役人ハ知府之役所知府之国分候ニハ馳走
十二碗菓子盃を出し候人則知府まて相出申候衆之唐人
八知縣之盃も請得申候知府之盃を其外字之
事ニて申候由官申之候
其後又五郎文治上陸唐人も役所へ召滞在

菓ハ酒と饅頭汁限右南人船之者を残し差し候所御方ニ而

右之人よりハ下方なる者と相見候得共違ひ候由
大官ニ而

エモンミンホそれハ役所之振舞ニ而御座候ミンホニ而私共住居

所おくいし候十一ヶ月船頭主従公興宅ハ度々振舞とて候ニ而勅

ブサンこニハ何事も存不申候右婦女其外関取致候ニ而候故

追々御酒を右之京宜和仕る後ハ甚見候故者も飯ニ糸心

聊ニ御人前ニ而トンスイ箸を日本人之食物鉢抔放汁限ん付

候ニ而其品之ハ肉数品豊之菓酒菓子豆腐膳菜

魚類何々る擦さおく其之ハ随分丁寧成品と相見候ハ候

無品之ハ十二椀之志川不くふていりこ椀出菓子蜜漬

菓子之ハ豆腐と申ハ小麦之粉を玉子ニ而練り豆腐之座ニ

拵ニ而致し方ある之ハ十二椀之料理不常ニ豆腐なとハ

無之申上候五官中之ニ

其後トンスイ方ニ而料理を出し寺ニ而抔筵仕饗物も相併まて

私共を振舞申ニ而饗物なとも一度振舞申ニ而此それハトンスイ相併

被ニ而此両度ハ勿論魚数肉数ハ豊之ニ而柳ミンホ方宴相之二三

日前役筆として菓物之類ハ又ハ振舞ハ來申ニ而此時ハ我主財副

トンスイを呼我夜食振舞ニ遣し料理ハ宴物之通致候

急度ニ而吟味致し候申ニ而

此飲食なと申候ハ賤成く振舞まて卓子（シツホツ）豆飾十二椀と

ガラス使用

料理ニて賣之候由但十二椀宛半卓ニ高盛ニ仕候て
賣候五官中之候

右之外ハ振舞候其外ハ儀式無之候故支那中ニ食物高盛ニ致候
候而無之候尤諸事申物ハ用候仕一向宜事候右何事も
美しく候ニ致事申見聞も不仕候料理候ハしく方萬ハ如見儀ニ
候て

一家居之事町並碁盤割りて候新葺子建並ニ候て屋根ハ瓦
背ニ二階造り柱礎ハ無之皆礎石ニて候ニ仕候て門ハ格子垣ニ仕
見掛け日本ニ違ひ無之是様も同前ニ仕候て商人ハ家ニハ賣物を
看板書付ニ仕候て見ゆる候ハ候様ニ致し共ニ帳面へ書付置候て賣
物ハ振舞候儀ハ承申候寺方ハ飾り振舞置候振子も無之候て
是又私共ニ仕候ハ大キ成寺院一向見へ不申候堂塔ハ結構なる
何方ニても見當り不申候仏像ハ承り不申候有之候哉大方日本之如屋
数多く結構ニ候日本と替り申候ハ之ト處其往還ハ石を
端々までも石を敷詰雨天ニも道ニぬかり無之水溜り不申
往来仕

一右地之事湊ハ大形芝山ニ高山無之木ハ成り候無之候家
多ク山ハ不申候見え申候海ハ私共見え候とハ遠し其無之候小
沖も浅き磯網七ひろ八ひろ程下り申候磯邊ハ水の底ニ砂土
松残り候て見え候水底ハ泥深く船繋き場ハ皆遠磯ニて
有之候海ハ何方も如此ニ候て川ハ大小とも多く見え不申候

ガラス使用

ミシホ之船入ハ解候之門下ニ而有之町内小船橋有之西之船中より見候得は
此川ハ水間フカク橋ハ掛られ不申候得は元ハ壱文ハ壱銭宛の船渡ニ而渡し
中右民乃ゆるしをいたし船板をかけられ候得は大船を十二ハ艘ほと鉄
ニて繋き之波のさし引ニ随ひ自由ニ船を往来致し上ハ板を並へ申候
寧波之城下ニ凌橋門と申鉄板ニて包候大門往還筋ニ有之候
此門を通り小船橋をかけ此船橋之事をさん江橋と申由承
曲五官申し

一草木之類何も暖食物を見申候得は名も不存木抔も多く有
有之候得共木之様子甚替り無之候人家有之候ニ新之物小ハ
桜海棠なかり見申候

一鳥獣之事珍敷物見当不申候牛馬御座候得共雑抔も一切見不
申候鳥ハ役人之家ニ通り候節見申候馬ハ屋更茂多日本より小さく
無之候猪抔も華之様致し申候

一寒暑風雨之事紅夏冬分ハ無相暖之事ニて暑気ハ余強く
御座候雷ハ度々鳴申候得共前後年之内ニ当り不申候地震ハ終ニ無之
候由四五年ニ一度おこり候事も有之候由四年ニ大
風大雨致し申候得共何方も無之雪ハミシホニておち申候フ
ケンニて降候由内ハ度々雨降申候ミシホより当年分早く飢饉（キキン）ニ及ひ
候由承知仕候
寧波台州温州杭州之地当年之月より九月迄雨降不申

田畑旱損致人民飢ニ及ひ候ニ付寧波ニ而提督両元ニ而常
八八人并之輿ニ乗り候人数ニ而ハ素足ニ而毎日龍王廟ニ参
詣致され香を焚き讀経有之雨を祈り候節ハ其ニ而雨ふる
くの如く為致候ニ水を入之様ニ柳枝を挿て地之上ニ飾り挿て
ニ而申候龍王廟の位牌ニハ五湖四海行雨龍王之廟と書記
一廟ニ二ヶ所宛此廟有之候由委細五子官申候
一時令ニ而五月節句白色ヱモンニ而立候由本ニ之ごとく新ニ安菖
蒲を飾る申候粽ニ而餅ニ竹の葉ニ包候膳ニ而ハ其まゝ戸口ニ飾り候由
此節ハ申さり日本ニ而ちまきの事ニ而唐人ハ粽子又ハ角黍と
申候由ニ御座候

廿日船軍ニ拵候ハ舟ニ金入ニ結候結構成る夜船ニ乗り候唐
人大勢船ニ乗り候様子ニ而見物仕候ニ而ハ甚賑ニ御座候
船軍と申事ハ刔龍（パイロン）ニ而御座候其数ニ船ハ五十艘斗
船を出し一艘ニ拾人但廿人宛船ニハ龍頭龍尾を拵五
色之旗を立並銀之鋲金襴紙子をもつて飾り立又太
鼓ニ而をたたき鳴し各刔（カイ）櫂を持て水をかき出先を争ひ
ら走り候而両岸ニ而競渡と申候見物之船より活（イキ）鳧（アヒル）
の頭を剖候を放て押流ニ候得も危難を不絶かけ出
候処を左右ニ船ニ而草ニ取候刔龍の競渡ハ此事を致候得ハ
瘟疫有之り候年ニ必其之候厦門又福建ニ送ル

皆同事ニ御座候由五官申候　此判断ハ長崎ニて覚学ひ候由申候

七月九月之節句ハ常之通ニ而何も替り候様子無御座候

七月七日ニハ乞巧會とて酒肴を以て牽牛織女之二星
を祭り朋友寄合申候　九月九日ハ高キ山ニ登茱萸の酒を
呑候事有之候由五官申之候　然共左様之事をハ見不申候

と私共へ申候

盆中ハミシホニ繋候肉まて旅宿之二階より見候處盆毎日の
事ニ而格別なる事又ハ町内ニ而も通燈籠抔様なる之事無之候

私とも見へ不申候

盆中を蘭盆會と申候　信心之家ニハ灯籠をつけ候僧も参り之候

由五官申候

私とも旅宿之寺ニ而日本之様ニ施餓鬼なと致候様子一向無之（平日之通ニ御座候）

関帝廟ニハ仏事も無之候得共寺之媽祖堂などハ施餓鬼も致す
有之候参拝とて墓参りなとも致し候由五官申之候

七月晦日夜過并家々に燈籠を焼き線香を地ニさし置申候
めす様ニ候て日本ニ与限ハ在之申候

是ハ地蔵菩薩之祭礼ニ而町内家々之前ニ其墓を置一ツ宛ニ列
燈籠を灯し線香をハ地ニさし置申候由五官申之候

一　唐國産業之事ハ委キ儀ハ存不申候　織物并大工鍛冶一切諸職
人之業致し候處存不申候　此海辺ニ居申候所ハ漁船釣道

ガラス使用

具引綱ホ揃通り候而ハ二所まて見へ申候得共是又沖ゟ之儀ニ候

見不申候其外名儒名醫名畫能書等一切雜藝之儀承

私共心付可申儀も無之候故見聞共ニ不仕候然ル漂流人之貧

福ハ家居衣服ホ迄ニ相顯れ候様子ニ而相通り所ニ罷在候

もらひきし乞食も多く有之候ミシホ抔ハ當年旱損穀ニ飢

饉ニ付袖乞仕候もの數多相見へ申候餓死も有之候由城下ゟ

大船四艘ニ米を積廻し飢人ハ救米被下候様承申候

飢饉之節總督ゟ北京ヘ奏聞有之米穀二十万石湖

廣ゟ積廻し候由承り申候

一五穀耕作之儀其土地之儀ニ而御座候米ハフケンヱモンミシホ抔ハ

一米ハ両度ニ取申候田ハ二月仕付ケ五月ニ苅六月ニ植付十月ニ苅

候由ニ御座候稲ハ稲の以私共見なれ候よりハ十別かいなく候米

も甚下米ニ而味も無之候

年中ニ米両度ニ取候ハ福建寧波ホ斗ニ而其外江南之地ハ一歳

一度ツヽ取申候二月中麦と稗とを取り三月植付申候由又官ニ而ハ

粟稗大豆大麦ホハ見当り不申候小麦ハ多く作り田畑之様子

大方日本之通ニ而牛馬之骨を焼灰汁ニ入れ肥しニ致候由

焼灰并骨を積置ケ有之候をも見申候尤大小便なとも賣買候由

大切致し申候

此外大豆の油を志ぼり候粕を豆餅と申候て肥しニ致候此外

ガラス使用

多湖廣より出候ハ大小便乃肥し稲ニハ用不申候大便ハ野菜計ニ
用ひ小便ハひともしとふんそくとまぜ合て用ひ申候賣買ハ大小
便一荷を菜種の油一升茶碗ニ代へ候る積ニ而賣買致候但
是ハ南京浙江斗の事ニ而福州ニハ一荷ニ付三錢ツヽニ而賣買致申候
是も同屋有之候名を糞頭と申候由五官申候

其外細鍬鎌臼之類一切之農具おゐて尺當りにも有之候得共細ハ（略し申候）
一一切賣買之通用錢ハ諸事補錢ハ致申候米升寸之升よりハ小ク高サ三
寸五分ニ而渡し四寸五分ニ而之候是を一升と申候
米壱升と申ハ掛目二百目有之候由五官申候
當年ハ早損并米穀高直ニ而壱升代錢弐拾三文宛ニ而買申候豊
年ニハ五六錢致し候而買取申候
米直段平生ハ一升付九文拾文位宛致候由五官申候
銀ならハ錢相場ニ而取り不申買物ハ都而錢ニ而取引仕候
平生錢壱貫文ハ銀拾弐分十匁ニ而時々少宛高下有之由五官申候
其国中ニ而銀之ため木綿給之唐人着物一ツ代錢百拾文位之
唐人筆桃一ツ拾六文水牛之櫛壱枚拾六文縮之唐木綿四尺斗
之風呂敷一ツ七拾文此外にも宛當用調候得共直段ハ覚不
申候

大概右之通ニ御座候

一當時帝王之儀并唐玉ハ不及申外国迄も治乱之取沙汰相替
候儀承り不申候一向承り不申候喧嘩口論仕候者ハ有之候得共其
外者ハ申候

一右三ヶ所共湊口ニも番所有之候白キ布旗を建置岸ハ
小船数百艘繋置候入船出船とも不審成し出入者掛り切手を
指出候とかし役を請ケ候役ゟ役人大勢罷出荷物相改候後の
荷さしおて為役見申候右番所壱ヶ所斗ニまく是く候ニ之数ヶ所ニ
有之候

此番所営汛とて船之往来切手を相改人別を糺し悪黨の入込ハ
不申様ニ吟味致申候尤ヶ様の旗ニ緝盗安民之四字有之由五官
申候

一モモン之海邊ハ切石ニ而四尺四方ほとニ切向左右三面を石ニ而拵置候
間三四尺宛きされと有之而も浪ニ山崩るゝをふせき申候大石大矢六ツ
沖之方指向並置申候エモン申口ニ小嶋有之番所有之陣様

急候節ハ此番所之網も右之通紀大筒六挺程宛置之候

一ミンホ之西方町外レ寺こ有之平地甚高き塔有之候是を見物
仕候塔の造りハ丸ク七重ニ而高さ何丈有之候哉唐船之帆柱を三継
斗ニ致候程ニ相見へ申候私共見物ニ参り候扉子も無之内ニ御座候委ハ
見不申候尤何之塔ニて如何様之儀候哉不申唯様子見物致
候斗存申候

此塔ハ天峯塔と申候 明朝より有之候下ハ丸ク上ハ八角ニ御座候て
も土地の不祥なる事をは風水の悪敷候と申候左様成所ハ
此塔を建候得ハ風調雨順之五穀豊登と申候意味ニ御座候由
五官申之候

一閏五月エモン逗留中役持之誘ひ候ニ付手寄世廻傳ひを出在斗

ガラス使用

余り廣大なる廣野に於ては軍之稽古なれ共中にも唐人
夥敷相集り候ハ大概毎ハ凡五拾人程宛大旗有之小旗六十
本程立し凡三千人と積り申候右之旗毎ニ有之馬ニ乗候ものハ
壱人毎ニ之指揮立て其内弓を持候もの斗具足を着申候
矢ハ射不申候鉄炮ハ筒一ツと相見へ玉なくして鳴物打放申候
之鎗之様成ものを持候者ハ刀を持候ものも有之右ニ持居候
大なるかさを持居申候此者共五六人一所ニ集り候仕方右を
振手致し候得ハ混雑して見へ申大鼓を打候ハ又て豈を
かし切合申候右之場所ニ石を置候臺有之其上ニ六七人
ニ太鼓を打喇叭を吹幣を振申候ニて指図致し進退仕候
振く致申候高さ之縄キ十間斗五百斗と相見へ候役所之振舞
の在之幕を打出し中ニ八人大勢在之候様ニ相見候旗之数
御刀之飾具足之様子なとハ遠く相見へ候得とも分り
不申候得共備ハ何分重キ事ニ能見申候見物ハ数万人
在之候其内私共を見物致候者多く集り候故久敷見物不申候に
儀も迷惑ニ存候ハ引取申候後之様ニ承り候ハ当年ハ戦役有
軍稽古有之廈門之提督組下之兵士かけ引を教て集り
此組下凡三千七百人程も有之候廣野ニ申ハ教場ニて稽古
場ニ集り一組五十人と一旗と申候旗を持し者を教師と申候此
者之進退ニ随て致候ハ是迄の集り皆掛り立斗ニて並稽

右一月ニ年三六九ノ日て此迄し乃内騎戦ニ騎合日歩戦之
騎合日弓鉄炮ニ而くふなりける定日有之は此日ハ歩戦ニ騎合
日ニハ今の有之は弓を持ける者斗具足着用の元来ハ家具
足なとは着用ハ取モ弓持て具足ハ亮甲とていりかく具足
と申ス人ハ其外ハ晴甲と申て鉄乃玉を木綿にて縫ふくみ申は
衣外分有人ハ具足着用ハ猪子おそれかは亮甲ニ来らハ一つ尽
の鉄砲ニ而猪目宛晴甲之者ハ九匁七分宛ニ而揃武ける下有
ニ衣衣しかへりて出る後ハ多分ハ藤牌と申ハ家
ニ猪にて形を隠しるを八梅花陣と申人の肩ニ人を
のせさんきふ至い藤牌をかさして身を隠し以来
梅の花ニ似申は衣名付ける名目ニ而御座候右之者は其外鼓
亭と申は四ツ立る桐の木を継は雲ニ而此役人を吹鼓手と申は
其外猪の役ニ而ハ帷帳と申ける提督ニ見分之場ニ而御座候
初ニハ喇叭を三度吹太鼓を三度打ける左右ニ陣を布申は後ニ
ハ鑼を三度打ける各退散致はいつも肩天分始居ゐ迄ニ候
申は尤見物人をも禁し不申男女細五官申之は
一ミンホ遊ニ而内府并ニ罷有候ニ社ニ猪放而踊るなと見
物ニ参り申は猪などトンスイ誘ひ申は手取越申は家々ニ而借
物を飾り参りふとの様子ニて大鼓笛三味線ニ而鳴物を囃
し猪なと猪放るを越し申は誠何と申候哉トンスイも

蘇州咄も承り候ニ此踊といふ度々見物ニ参り候処其毎ニ私
共を召連申候ニ付多く候得は遠慮ニ存知ず承り候処ニ
此辰信公興宅之側ニ媽姐之廟有之候ニ付志願有之者は役者
を雇ひ踊を致させ候由常ニ有之候由萬福寺ニ而も媽姐

船神ニ而御座候唐人共殊更ニ信仰致候此踊ハ唐人共之望ニ而
度々有之候由ニ而御座候

一ミシホ逗留中此所之主之者共ニや重き御方ニ而他所之船場ニ参り候
私共旅宿ハ船着之上場ニ而候処上陸致候而右之荷を
持参り私共ニ而も今日見ル候様ニ申付右之紙ニ私共名前
書付それ〳〵持せ旅宿之前ニ而華表門ニ而国之御士より時之様子

矢之中ニ而や鞍鐙鳴り音ニ放之致し候得共同勢弐百人余り斯
列ハ大旗を先立てる者之者を持候者十四五人相並ひ長刀之類
抱鉄炮を持候者も多く有之候而国王ハ朱塗之綱代之乗物
こし之乗り八人ニ而かつき中ニ而此之様子ハことごとく見へ申候其外み
まの着下見へ申候而案内老人ニ而白き鬚多く有之候人種相見へ
中ニ役人衆下之役人名駕も立り馬上も有り皆く候返迎出候様子
見へ候而案内致し候通り申候列立様々相知らせや適ニ喇叭ヲ
吹申ニ而其外之義ニ見事ニ候
此辰杭州府之桜院寧波之紀民見物ニ参り候ニ付
同じ荷ニ而代官ニハ信公興が桜居ニ罷り候而名札等

持せ候者ハ此所ニ日本人ニ申さハ撫院と申候ニ乃ハ日本ニ云ハゞ
大旗撫院の旗ニハ四爪の龍紋有之候撫院常ニハ八人舁
乃轎ニ乗り候得共此者ハ見分ル為四人舁ニ而上ニ而ハ朱塗
地網代ニしハ寧波之提督之迎ニ参り候砌ハ為乗て居被
此ハ参将副将之武官ニ而右大夫ハ亭主方分役家来相成候
常ニ一石火矢を仕掛候而有之所ニ而ハ甚多く此者家廣ク
用意致候由之是細工官中ニ而

一　三ヶ所ニ在留之内女を見申候ニ纏足ニ致し候得ハ日本之女
とく女之部ニかハ致不申候由ニ而蒲団ニ根纏ニ糸ニ而結も女
者ハ見へ不申男世帯と見得候初ハ女子を抱出候

所ニ而見申候大形ハ髪ニ半ニ結形ニ而櫛ハ花の模様ニ而
くしの模様物もさし居申候男之子共ハ額子ニ而髪を剃りて
髪しかぶり物ハ無之衣服水呉ハ常ニ通ニ而洗ひ居申候
右所私共旅宿を移し参り候得とも付而呼ハれハ無之
迎参ニ而能々見ニ参り候ニ付御様子日本之子ども着替
参り来て

一　寧波ニ而当船荷主信公興宅ハミンホ之町中ニ而私共旅宿之
所よりハ二丁斗隔り候門構ニ而大家居而二三十人之人数
不絶身上宜ク相見へ申候
信公興義ハ手持之者役之田郎五六十人余有中ニ而出業場（中之ニ）

ガラス使用

一　私共旅宿ニ越候節二階ハ通し縁ニ腰かけなと有之寝所相
縮掛ケ候而結候處中ハ灯籠蝋燭を立置候而在所
之椅子諸居見苦敷相洞沢加椅子ニ候

一　黄物ニ而三ミシ木を日本ニ仕立之木綿着物一ツ宛銘々黄申候
唐外三ケ所追而中附添之役人又ハ先ニ参り役人何も着服ニ
入候紙扇子楊枝耳掻等之類も宛持参致居申候唐外相
夫々見物ニ参り候者も有之数々宛持参致居申候相分り不申候
寧波之唐人ニも読之有之通辞ニ不居申候

一　帝王より下され候銀牌
此銀牌ハ天子の賜りを日本へ見せ候為ニ而漂流人常ニ首ニ掛居候

福州ニ申付られ候右品を掛候首ニ下ケ候様在役之者申ハ
総叶ひ申聞候ハ北京より官人持来り福建之総督ニ相渡し
夫より浙江寧波之知縣まて相渡候ハ至重之事ニ御座候
右龍紋ハ五爪の龍ニ而天子ならてハ用ひ不申候由唐
人共申聞候

寧波ニ而日本船之払代銀儀物之代銭且又日本ニ仕立之衣類木
綿着物銘々ニ一ツ宛木綿蒲団ニツ并ニ米ハ役所より下され候由
尤ミシ木綿船之御着用方より相渡申候此外ニ着用より送り
之分木綿類書物木別紙米付之通目録を相渡候ニ一同ニ
相渡し申候

一唐船并阿蘭陀船ハ日本船ゟハ甚手かるく候帆も引揚ケ候ニ付
りハ如何様之風当りても下ケ候事決而無之日本船之帆を下ケ候
所ゟ帆耳ニ有之候小綱を附く申候而帆を捲上候而風
を積ミ候中ニ而和船ハ船底ニ十二（ジュウニジイ）おゐて積手薄候而唐船之
異方ハ危き様ニ相存候所能波毎ニ乗り引揚ケ走り候而同ハ
杉板（サンハン）ニ而右船ハ船底迄之廻りニハ何程ゟも様無之中ニ而楫ニハ拾人斗
左右ニ引立綱ニ而楫取仕候其外船を居候中ニ方針を納メ
昼夜とも同様ニ蓋夜ともニ針を見申油ニ而灯
申候扨又日本近く沖ニ而和蘭雲此様成之遠ニ見へ候ハヽ
候苗帆柱の上ハ何かりそくとてん之候ハ上陸山を見申候和蘭れ

候段銀三拾匁之祝儀として差遣し船神へ備ひ船玉と
号し鶏を殺し其血を焚紙を焼き羅を打船中不残礼拝
仕候其外ニも相替り候儀無之候

日本之山初而見候ハ五俵の女俵ニ而銀遣し候事を苑紀ニ而は
之祝儀ニ候ニ付候儀ニ一番ニ山を見付候者ハ呉ニ候手之由右官中ニ

一私共国元出船ゟ一切之武具類有之候も積不申候
但利右衛門又五郎両人脇指一腰宛所持仕候此内利右衛門脇指
漂流之節ニ船ニ而海中ヘ打込申候又五郎脇指ハ始終
手放し不申候此度持帰り申候此外日本金銀持参不仕左右
在留中南京之者ハ指而利欲之ものニ而猿抔ヲ買取候

不仕候持居候諸色無御座候御改を請候外ニ隠し物一切不仕候

右之條々少茂相違不申上候以上

寶暦元年辛未十二月廿八日

又五郎

伊七郎

五兵衛

利右衛門

長助

文治

積荷物并唐國ニ而貰物覺　南部大膳太夫領分奥州盛岡郡

白濱村　久保屋吉之丞船

神力丸十六端帆　但弐百五拾石積

右乘組人數之覺

一禅宗盛岡郡釜石浦　石應寺旦那　白濱村船頭　又五郎　未五十二歳

一同宗　石應寺旦那　釜石浦揖取　利右衛門　未四十二歳

一同宗　寺不相知　同所荷宰領　利兵衛　未五十六歳　厦門ニ而相果申候

一同宗　石應寺旦那　白濱村水主　伊七郎　未二十五歳

一同宗　石應寺旦那　同所水主　五兵衛　未三十七歳

一同宗　石應寺旦那　釜石浦水主　長助　未四十[illegible]歳

一宗旨寺共不相知　文石村水主　傳[illegible]　未四十八歳　天草ニて相果申候

一浄土宗　志光寺旦那

大畑村炊　文治
未[illegible]歳

船具之覺

一鉄碇　六房　内小碇一ツ於福頂縣神力丸へ相渡申候

一揖　一羽　右同断

一苫　二百五十牧　是ハ風難ニ而追々損申候而薪之代焚仕廻申候

一帆柱　一本　是ハ洋中ニ而伐捨綸金二ツ相残り候

一艪　四挺　是ハ於福頂縣神力丸へ一丁相渡申候

一端船　一艘（櫓弐挺　械四挺）

一炊道具一切膳椀類　右同断

一白米二斗入六俵　是ハ洋中ニ而給仕廻申候

一薪　八駄　是ハ洋中ニ而焚仕廻申候

一味噌　一桶　是ハ洋中ニ而給仕廻申候

一拾六端帆一捆　是ハ持帰り申候

一苧綱　六筋　内一筋碇付ケ福頂縣指置申候　以五筋持帰り申候

一船魂　一包　是ハ持帰り申候

一細工道具一包　内（斧鉄槌鑿　鋸うふもこ）　右同断

一白苧　一包　右同断

一脇指　一腰　内壱腰ハ指捨申候　一腰利真ゟ龍神上申候

一鏡　四枚　是ハ龍神ニ上ケ申候

一はさみ　一本　右同断

一帆桁其外船道具類

積荷物之覺

一塩鰹　百八十四俵　小〆八百六十一本
右者南部釜石浦川端武三郎荷物ニ而村田七郎兵衛江送り状

是ハ拾福頂縣神力丸一所ニ積ム

一同　三百六俵　小〆千四百三十二本
右者同所同人荷物ニ而菊屋勘三郎江送り状添

一同　七百七拾三俵　小〆四千弐百四十九本
右者同所白濱村久保屋若之丞荷物ニ而村田若右衛門方へ送り状添

一同　百七十四俵　小〆弐千七百七十四本
右者南部釜石浦大坂屋理右衛門荷物ニ而越後屋七兵衛ニ而四日市村田若右衛門方へ送り状添

一塩引鮭　二百七俵（外ニ六本入壱俵）　小〆千五百廿四本（太神宮初穂）
右者同所菊池助四郎荷物ニ而越後屋七兵衛ニ而四日市村田若右衛門方へ送り状添

一同　三百八俵　小〆千三百九十本
右者同所大坂屋理右衛門荷物　右同断

一同　九十七俵　小〆四百六十九本
右者同所白濱村久保屋若之丞荷物ニ而村田若右衛門方へ送り状添

一筋子　二樽
右ハ同所釜石浦萬次四郎荷物拵子越後屋
七右衛門江戸村田善右衛門方送状添

一同　七箇
右者同所大坂屋理右衛門荷物　右同断

一串貝　四十七俵
右ハ同所大槌四日町吉見清之丞荷物江戸
大船町塩屋太郎之進方送り状添

一同　四十七俵　小数九千壱本
右ハ同所同人荷物江戸南新堀万屋助之衛に送状

一同　百弐十六俵　小数四百五十九本
右者同所白浜村久保屋善之丞荷物江戸四日市
村田善右衛門へ送状

一鰹節　六十二俵　小数八千七百本

一干鮪　弐十一俵　小数千五百
右同人ゟ同所送り状

船頭水主自分荷物之覚

一金子　一両
此金ハ持戻り申候

一銭　弐貫四百文
不残ハ遣ひ捨申候
外ニ親方ゟ舩中銭四貫文請取申候此銭遣ひ捨申候

ガラス使用

一塩引鮭　百十六本
一塩鰹　五百二本
一干鯖　八抱
一筋子　三樽
〆
一銭一貫五十文
一干鯖　五俵　きれ捨卜は　小數二百五十牧
水主
伊七郎
一塩引鮭　三十二本
一塩鰹　三百二十本
一ふかり　一俵

〆
一銭九百文　きれ捨卜は
水主
利右衛門
一塩鰹　八十本
一塩引鮭　七十三本
一筋子　二樽
〆
一銭　二百文程　きれ捨卜は
水主
長助
一同　五百文　同断
炊
文治
一塩鰹　二百本
右積荷物数是之雖風雖凌破船可仕躰故無是非荷物

ガラス使用

之内千斗も追〻ニ振捨申候尤船中及飢渇鰹節串貝少〻
之食物ニ仕候然處福建之内福寧府福頂縣之船之節ハ
至り右之振捨残荷物

一何も汲て見候へハ積置候故腐り多用立不申候唐人へ付候（引）
舟方ゟ相頼不申候得共唐人共方ニ而取計ひ賣拂候由私共ニ
も噺仕候右拂候分左之通ニ御座候

一唐銀二百二十六目五分二厘　是ハ於福頂縣神力丸用立並唐人共拂呉候取代銀

一唐銭百五十貫文　是ハ腐候荷物於福頂縣唐人共賣拂呉候代銀

一鰹節　十九包　　但一[illegible]百五十本入

一干鮹　十包　　但一包十捆入

一串貝　十六包　　但一包五捆入

右者於福頂縣唐人共腐荷物賣拂[illegible]候砂糖小波等之
方ニ預り置此度御當津江着之上御役所江唐人共ゟ引渡申上候
八人之者共國元ゟ所持仕候衣類并財此度持戻り候品〻之覚

一古小夜着　一ツ

一木綿嶋古着物　一ツ

一同蒲團　三ツ

一古股指　一腰

一嶋木綿頭巾　二ツ

一古袷肌着　四ツ

一蒲團真綿　一ツ
一風呂敷　四ツ
一さしこの肌着　一ツ
一箸箱　一ツ　但箸二膳入
一小柳縮裏　二ツ
一小刀　一本
一錐　一本
一櫛　三枚
一ござ　一枚
一木綿嶋古布子　二ツ
一円綿入古羽織　二ツ
一円古袷　一ツ
一古竹皮籠　一ツ
一袷羽折　一ツ　但（表木綿 裏海黄）
一木綿合羽　一ツ
一古夜着表裏　一ツ　但木綿
一郡内嶋古小袖　一ツ
一浅黄紡古袷肌着　一ツ
一丹後嶋古小袖　一ツ
一上田嶋古袷羽折　一ツ

一細嶋古小袖	一ツ
一青海嶋古布子	一ツ
一破蒲團引解	一ツ
一柳籠裏	二ツ
一荷鎗	一ツ
一茶宇蕨口	一ツ
内	
一纂	一ツ
一大織縞帯さいふ	一ツ
一珠數	一ツ
一長門下總（巾着付）	一ツ
一木綿嶌小切	六ツ
一股引	三ツ
一古貫綿	六ツ
一黒木綿帯	一筋
一木綿帯赤	一筋
一古着物引解	一ツ
一木綿縞古さいふ	四ツ
一不我くいしき	一筋

一木綿古切　四ツ
一白木綿帯　二筋
一銭　百十三文　但袋ニ入文有之
一手拭　二ツ
一古小柳籠裏　一ツ
内
一櫛　二枚
一鋏　二丁
一羽折紐　一掛
一鰹針　一本
一帆縫針大小　十七本　但竹ノ筒ニ入
一釣針　二本
一覚帳　二冊
一小鏡　二面
一三徳　一ツ　内　金入燕口一ツ
嶋繻子かみ入一ツ
一いりき　一ツ
一古方針　二ツ
一剃刀　一挺
一松前ゑふりこ　少し
一木綿三迪　一ツ　但守護入

ガラス使用

一舩綿古裀切　二枚

一市籠　一ツ

一釣道具　一ツ

一苧綱　三筋

一斧　一挺

一挑燈　一張

一小柳籠裹　一ツ

内

一櫛　三枚

一瓜切　一本

一南部石ノ玉　一ツ

一脚絆　一掛

一鑢（ヤスリ）子　一本

一筭盤　一面

一荷物送り状　二袋

一取〻に之手状　一袋

一反故　一袋

〆

唐國ヨリ貰物之覺

一龍牌　七枚

右ハ北京帝王ヨリ被下置候旨信公興ハ方ヨリ七人之者ヘ相渡申候

一綾木綿布子　七ツ　但日本仕立

一木綿蒲團　三ツ

右ハ寧波官所ヨリ被下候旨信公興ハゟ七人之者ヘ相渡申候

一廣輿記　六冊　古今持渡り候書物ニ御座候

一左傳　四冊　右同断

一黒木綿　四端

一紺木綿　二端

一布　一端

一蒲團表　一ツ

一綸子　一切

一純子　一着

一錫酒瓶　一ツ

一緋木綿　三端

右者船頭又五郎ヘ

一白木綿　二端

右者水主伊七郎ヘ

一白木綿　五切

一唐古衣服　四ツ

右者揖取利右衛門ヘ

一紺木綿　四端
右ハ水主長助へ
一白木綿　一切
一絣木綿　二端
右ハ炊文治へ
一木綿けんちう　一端
一白木綿　一切
右ハ水主五郎へ
一絣木綿　四端
右ハ水主傳六へ

右之通七人之者共ハ帰朝之為餞別信公與古ゟ相送り
申候
一水牛櫛　一枚
一唐人古袴　三ツ
一小茶出し　一ツ
一貫手古綿　一ツ
一鼈甲楊枝　一本
一真鍮耳掻　九本
一毛帽子　三ツ
一唐多ばこ　七包

一日扇子　七本
一革巾着　六ツ
一入子毛巾着　一ツ
一琥珀緒メ　五ツ　損シ
一練玉　二ツ
一白い玉　一連
一御緒メ　一ツ
一真鍮ぼたん　六ツ
一流金ぼたん　四ツ
一彫物木たばこ入　一ツ　損シ
一唐腰指　一ツ
一唐衣　一ツ
一唐人衣物　一ツ　但一ツ肌着
一唐木綿切　五ツ
一黒檀箸　五膳
一具燈籠　一ツ
一唐墨　二挺
一撕掃　七本
一牛角たばこ入　五ツ
一紫檀筆立　一ツ

一同猪口	三ツ
一京石	一ツ
一香合目鏡	一ツ
一珠数	二連 一連紫檀 一連菩提樹
一孔雀尾先	五本
一鼈甲櫛	一枚
一唐硯	一面
一唐筆	四本
一塵拂	二本
一蛛	少
一氷砂糖	一包
一羚羊角ノ先	二本
一唐繪	九一枚　大小有
一板木繪	十五枚
一墨跡	七枚
一初學雜字	一冊
一鳳書	一冊
一靖臺戰圖	一冊
一省庵府君行狀	一冊
一縣金雜字	二冊

此人紙之書物紅毛之者ニ拔は
雜書ニ而邪法之事書のせは
物なるを云ふなり

一唐焼物小猪口　二ツ

一同小壷　三ツ　内氷砂糖入

一線香　一包

一竹線　二抱

一唐剃刀　七本

一真鍮鎮　一本

一木綿古蒲團　三ツ

一唐茶　弐包

一滑小切　一ツ

一古掛物　二幅　紙表具損し

右ハ唐国ニ而貰ヒ申候

唐國ニ而調物之覚

一唐挖　四ツ

一唐人袴　五ツ　何も古し

一蒲壷貫手古綿　二ツ

一古花毛氈　一枚

一古雪帽子　二ツ

一同切レ　一ツ

一唐たばこ入　六包

ガラス使用

一 唐巾着	二ツ
一 蠟石緒メ	一ツ
一 唐古秤	一挺
一 緋無量服紗	一ツ
一 竹籠具	四ツ
一 法眼菩提珠	一連
一 紫檀珠数	同
一 こみたゝき	一ツ
一 唐鏡	一面 但シ常之鏡ニ而怪敷品ニ無之候
一 円鏌	一ツ
一 香合目鏡	二ツ
一 唐剃刀	三本
一 円鋏	（大小）二本
一 水牛櫛	十二枚
一 角櫛	一枚
一 唐ござ	四枚
一 唐人肌着	五ツ 内一ツ綿入 但シ表ごろふく 裏白木綿
一 袷引解	一ツ
一 幅廣嶋木綿切	一切
一 飛紗綾古学帯	二筋

一同帯　　一筋
一こんとし帯　一筋
一紺木綿唐人古着物　一ツ
　右八品擬商用ニ而追々相調申候
右書面之通ニ而改候処毛頭相違無御座候尤當時
相残候荷物并船共持戻候而不都合之品ハ取上ケ候様返ゟ
可及御沙汰旨委細ニ被仰渡逐一承畏候以上

宝暦元年未十二月九七日
船頭　亦五郎
御奉行所

痢病之症

大白朮（炒四目）白芍薬（酒炒四目）補骨子（煎二目）白茯苓
懐山薬（二目）肉菓（麸粉煨五目）干姜（炒一目）煨木香
呉茱萸（八分）制川附子（二目）車前子（炒三目）
加煨姜二片　鍋焦湯煎
人参（六分）白當帰（酒泡五目）黒姜炭（一目）腿朮（炒三目）白芍薬
（酒炒一目）柏子仁（三目）白茯苓（二目）大熟地（六目）小艸（二目）炙甘草
（三目）杞子（二目）
加黒束　三枚
白當帰（六目）廣皮（一目）麻子仁（炒三目）生白芍薬（一目）半夏（二目）

ガラス使用

（麪炒）藿香（一目）建石斛（生二目）川厚朴（炒二目）紅谷芽（一目）生木香
（五分）枳殼（生一目）　加青竹茹一國

福建泉州府廈門海防廳加三級紀録四次許
本朝
聖天子文教覃敷四海澟一統之義
恩膏廣被萬方無弗届之區故凡屬外藩傾心向化
恭順輸誠以遭風飄泊者無不加意撫恤多方保
護俾得安全茲有
貴國又五郎等捌人于参月初陸日船隻遭風飄至
秦嶼港口當經福鼎縣查明船内裝有草包鹹搥魚
約有貳拾餘担令其寫字寫出日本南部金石浦人
飾給薪米護送廈門館驛安插本廳隨即訊供通
詳奉
各憲行令按名毎日給食米壹升塩菜銭拾文移
行福鼎縣查明船隻不堪脩整准其自行變賣同
魚貨賣價銭文統給該又五郎等収領内利氣壹
名于五月拾参日病故倶一一撫恤口糧并關税復
又當作人
恐在廈守候又另給口糧不見舟資送浙江寧波
便船附送回國此誠

天朝柔遠深仁至周至渥所有
貴國遭風撫恤緣由理合咨明爲此備咨
貴国王請煩查照施行須至咨者
右
咨

日本國王

大清乾隆拾陸年陸月初一
咨

大日本西海道肥前州長崎鎮府下野守源、爲復
書　移咨事夫惟
貴國仁綱覆世文教之化格于四表恭照
本邦德澤配天恤生之意溢于九閡凡編戸之氓跨
歷海洋運輸貨殖所以黎庶治生寔係
皇化廣被而遭逢厄者靡不沐其庇蔭茲者
本邦陸奥州南部民商又五郎等於去歲參月初陸
日遇颶飄至
貴國秦嶼港口已經福鼎縣查明船内裝有草包
鹹魚貳拾餘担令其寫字寫出
日本南部、金石浦人隨即移送厦門館驛累日飾
給薪米等項嗣又移行福鼎縣查明船隻不堪
修整准該船魚貨併令變賣沽銀兩統給又五
郎等收領更爲矜卹漂商難苦蠲免關税内有
利兵衛壹名於伍月拾參日身故方其病時撫
養調治以暨殯葬之事深荷顧盼其餘人衆
因恐在厦日久覔舟移送寧波府等情又附
寧波府鄞縣黄、移咨飭令行商鄭青雲發

船送回于國於拾貳月貳拾日平安而至又五郎等人照數收訖所齎咨文併又五郎等口供業經詳悉此誠

貴國懐遠之仁洋々盈々莫以尚焉因此該商所儎貨物即令貿易格外越例迅速回棹以酬效勞擬謝眷愛之盛須至回咨者

右

復

大清福建泉州府廈門海防廳許爺

大日本寶暦貳年壬申貳月　念八日

咨

署浙江寧波府鄞縣正堂加三級録七次蕭
爲咨明事恭照
本朝大覆載以無私萬國仰車書之盛
統胞與於在宥九天沐日月之光持沛
恩綸中外曾何異視重邀
宸眷顯連吏荷深仁今有
貴國又五郎等船隻被風飄至閩省業經加意
撫恤因之使舟恐稽守候當業護送至寕本縣
隨覔館安置給予薪水病即撥醫治痊另給路
費衣裝令商人信公興行商鄭青雲附送回國
並將開棹日期通報各憲外擬合咨明爲此合
咨
貴國王請煩查照來咨希將又五郎等回國日期備

文交發該行商鄭青雲餙令迅即囘棹以便轉

請

題覆事關

聖朝柔遠至意幸勿遲滯施行須至咨者

右

日本國王

大清乾隆拾陸年拾壹月　初一

大日本西海道肥前州長崎鎮府下野守源　爲復
書　移洛事大惟坤輿肇基兆庶均謡擊壤於欣抃
我朝同運和氣煦旮共宣承平之德化茲有
本邦陸奥州南部民商又五等遇颶飄至
貴國閩省護送情由業經披覧足徴
貴國覆幬之仁匪愉嚮尚在厦門今府移洛施行貴縣
飭令商人信公興行商鄭青雲艤舟於去歳拾壹月
初陸日開洋因風汛不利逗於
本邦天草沿海數日仍于拾貳月貳拾日擄入華航衝
地番汛飄流縁由逐一詳悉羈留閩省之際叨荷曲
待多方加意更蒙　貴縣安頓館舎給予薪水共羅
疾者撥醫數員儘加調摂另賑路貲衣裝等項按名
皇賞銀牌賜仁愛之意洵屬
寵領
貴國雍熙之德靡所底止該商鄭青雲誠實保護送
到可嘉業將所載各貨概令變賣格外越例迅速回

ガラス使用

掉以酬效勞此誠
貴國柔遠之澤光被所施均與
本邦象天之仁如合符契爲此伸謝於懇誠之需沛然
須至回咨者
右　　　　復
大清浙江寧波府鄞縣正堂黄爺
大日本寶曆貳年壬申貳月

護照　　和解
長崎鎭府復厦門海防書　　和解
同鎭府復寧波鄞縣正堂書　　和解
福建泉州府厦門海防廳許氏咨文　　和解
浙江寧波府鄞縣正堂黄氏咨文　　和解

本船ニ付渡ス護照之和解

署浙江寧波府鄞縣正堂加三級記録三次黄ケ為知
ラス廈門之役所ヘ役人差添ヘ引渡ス日本國之難商又五良
等廿七名者浙江之地ニ漂着候ニ付宜敷別ニ住居を申付諸事
氣を付介抱いたし置候處今度商人信公興ヘ申付船
頭鄭青雲を雇ひ本縣彭世彩之船を借受商物を積合せ
日本へ罷越商賣為致幸便以右難商を連日本國ヘ
返し遣し候右名前を富豊號ハ兼而申之咨文相添以來商人
連日本之王府ヘ罷越候趣御聞済被下候ハ鄭青雲ヘ申付候ニ付
其外役所を相守り途中ニ而難商を大切ニ取扱ひ候様念入候様

被命抱下ゟ以後之書付を差添へ三ヶ月限ニ　日本国之
御返答を申渡帰唐可致ハ甚混擾ニ而奏聞申上て指示
仕候儀　聖朝遠人をいつくしミ給ふ深仁ニりかたく申上候旨
違申致遣置候定る禍を派り出処を清館ニ致方無之候
本文之通取計可相当者也

咨文一角相與ニ

乾隆拾六年十一月初六日　給

右護照之和鮮

帰唐之上返上可致ニ

大日本西海道肥前州長崎鎮府下野守源　書を移咨ニ
復せる為の事　文惟ニは　貴国仁綱世を露ひ文教の化
四表ニ被る　本邦徳沢天ニ配し生を恤の意九圍ニ溢し　黎庶の
凡編戸之民海洋を跨履し運漕貨殖せる事
生を済る所以なり誠ニ皇化之広く波り候れ尽者ニ漂流
之難ニ遇ふ者といふとも安全を得せしむることなし爰ニ本邦
陸奥州南部之民又五郎等　去年三月六日颶風ニ遭ひ
貴国ニ秦嶴灘漂流をしめ候ニ付福鼎縣ゟ吟味ニ而送船中薦
豆之縕魚丸弐拾斤餘有之尚又文字書せられ候を　日本

南部釜石浦之人と年おし候ニ付泉速厦門之驛舎ニ送届数日
之間米薪等供給せられ其後福鼎縣ゟ越候ニ宗捨候船具
等吟味有之候處用達難成候ニ付船并帳面等一同ニ賣拂代金
られ代銀又五郎ニ渡、尚請取其上難病之難苦を労り関般を
差免候由且三条組之内利三郎・忠五郎ハ五月十三日病死致候由又病
中之按恤調養ニ致身埋葬等ニ不及手にて照ハ、仍己ニ至ニ儀を
至る其ハ候程又お残人数厦門之地ニ滞留久敷ニ付船を求ら
れ寧波ヘ被差送候由然処寧波府鄞縣黄氏ゟも咨文ニ而相
渉行商鄭青雲ヘ下知せられ船を備ヘ又五郎等帰国ニ為附
十二月廿日出帆差渡候ニ付右人数慥ニ受取咨文并又五郎等申候迄
以委細ニ被承届候段以貴國懐遠之仁洋溢として
是ヲ加ルヿ不少し依之行商鄭青雲ヘ被渡之荷物早速高賣
申候格外ニ順番を越して速ニ帰唐せしめ候聊功労ヲ
酬ニ稀文春愛之盛意を謝せん為ニ回咨を以申伸候

右　復大清福建泉州府厦門海防廳許翁

大日本寶暦二年　壬申二月廿八日

大日本西海道肥前州長崎鎮府下野守源　書之福咨ト
復する為之事　夫惟れは坤輿甚哉始め氾廣飲浙て

均く撃壌をなすの　我朝國運之和氣煦育にして
倶に承平之徳化を字ふ處に　本邦陸奥州南部民高
又五郎等難風に遭ひ　貴国閩省へ漂着せしめ候處今度護
送之者趣を詳に披閲せしむ　貴国覆幬之仁薄からすして厦
門に附分　貴縣咨文を傳則商人信公興行商鄭青雲より
停船を艤ひ去十一月六日出帆致候由風不順にて本邦天草
之地方に飄着致し数日之逗留同十二月廿日華航通津之
地長崎に令着船候處においては漂泊之段々逐一審問候處閩省に
覊留之日饗食應懇篤にして諸事世話をいたし加候猶又於貴縣
八館舎を設水薪等相与病苦之者には救急之醫師ヲ差添
懇に療養に預り其外　路費衣裳等迄賑給有之加之
皇賞銀牌設く寛宥恩賜仁愛を播揚せらるゝ之處　貴国
雍熙之徳何其是んや鄭青雲儀も船中懇切に介抱致し
送乗は退誠実をもつて右者共召連させ候而積渡は荷物
早速為貴國迄送らせ格外の義なれ順當を越て回棹せしめ
功労あり酬んか為也是誠に　貴國柔遠之徳光被之施実
均に　本邦天子象之仁と符を合るか如し依而懇誠之霈
然たる深を謝せんか為ニ今回復候
右　復大清浙江寧波府鄞縣正堂黄翁
大日本寳暦二年壬申二月廿八日

福建泉州府厦門海防廳（海邊守護之役所）加三級（位階三級）紀録四次（勲功四次有之）
（以を朝廷ゟ紀録せらるゝ也）許氏ゟ達しける恭くおもんみるに　本朝聖天子文
教遍く敷四海一統ニ儀を凛恩澤廣く蒙り萬方不至ところ
なりし此故ニ凡外國人を傾ケ紀を向ひ謹て誠實の心を存し候処
雖漂流之者ニ及てハ懇ニ撫恤セし之種く人を付安全を得セ
しめさるといふ事なし當年末又南部の者八人三月六日東組之
船難風ニ遭ひ秦嶼と云湊ニ漂着致し候付福鼎縣と云所ニ
於て吟味を遂候處船中萬包之塩魚凡二千斤餘積来セ居り候
文字を書セ見候處日本國南部金石浦之者と書出しニ依之木薪
等を与へ厦門へ駅舎ニ送其所之役所へ前々遣書ゟ吟味之上
各官不残下知を受右壹人前一日ニ米壹升野菜代として錢拾文
宛与へ且又福鼎縣ゟ越船を吟味致させ候處修復難相成ニ付
船并塩魚共賣拂ひ其右代銀を又五郎共ニ相渡請取セ候尤東
組之内利喜かと申者壹人五月十三日致病死候付是又一ニ加撫恤
口米并関税（口銭之事）をも差免し候　猶又厦門ニ久敷滞留いたし在候ニ
付外ニ口米を相与へ舟求浙江之内寧波府へ差送便船を以今帰
國候是誠ニ　天朝遠方を懐け候仁心至て周く至て深候故
貴國之風雅ニ至候者を憐愍を加へられ候故此ゟ遣し度候ニ付
委細以咨文（畨状也）貴國王へ進候　將咨文之趣を以御吟味
被下候

ガラス使用

右日本國王江達ス大清乾隆十六年六月朔日咨文

右福建泉州府厦門海防廳咨文之和解

署（兼官也）浙江寧波府鄞縣正堂（正官ハ正官副官有之ル内正官役所也）加三級（位階之三級也）記録七次（勲功七度有之ルヲ朝廷ニ記録セラレル也）黄氏ゟ申達スル　恭く惟レハ

本朝覆載を大にして以て私なく萬國車書の盛なるを仰き絶無と繞はる寰小宿に在る九天日月乃光りに沐す時に恩綸をこうふりて中外於て何を異視せんや重く宸眷をむかへく須臾も深仁を施ふ寰る　然るに又五郎乃船難風に遇ひ閩省に漂着致し候に付院より心を加撫恤いたし以便船乏く滞留久しかるへきに付寧波之本縣へ差送り護て館舎を求め且塩水薪を与へ病人ニハ医師を差し療治せしめ而して路費衣裳等相与へ商人信公興渡海之商人鄭青雲江申付候送り帰国致させ候に付出帆之日限各官所江申牒し移文可申之候ニ付　然る所国王江申達ス咨文を以御吟味可被下候文

又五郎等七人帰国之儀書付を渡海之鄭青雲江以渡シ急ぎ帰帆之節附ら下候て取次され　奏聞仕候ハ右

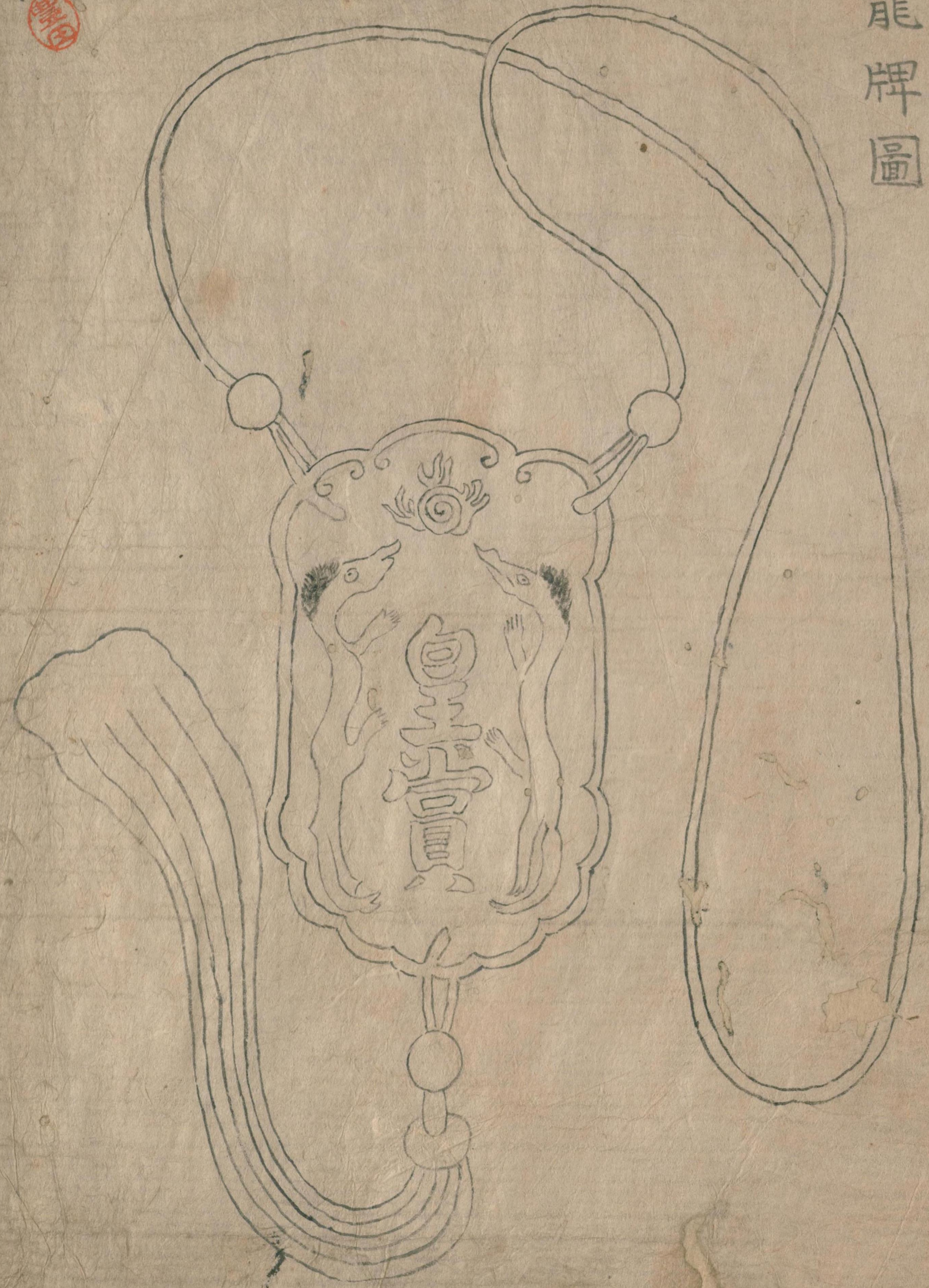
聖朝遠方を懐けらるゝに至る之を彰するによつて来る無遅滞指返給付可被下候依る咨文を以達ス　右　日本國王江達ス

大清乾隆十六年十一月朔日　右浙江寧波府鄞縣正堂

黄氏咨文之和解

ヘタイ

龍牌圖



ガラス使用

862
1

ガラス使用

ガラス使用